

「国際比較研究の枠組み構築—研究対象設定を中心に—」

佛教大学大学院 社会福祉学研究科 博士後期課程 孔 栄鍾

過去 4 年間、日本での留學生活を続けながら、私にとって一番の悩みとは、留學生だからこそ可能な研究領域を発見することであった。単にやりたい勉強を越えて、一步一步研究者の道へ進み行き、研究のオリジナリティを追求することは、留學生活のなかで自分のアイデンティティを確立することと同様であった。留學生なら、一度はこのような悩みや困難を経験したことがあるだろうと考えられる。これらの点から見ると、今回の第 39 回若手研究者・院生情報交換会は、その道を既に歩いてきた方、あるいは少し先んじて歩いている先輩たちのガイドのようなテーマで作られていた。

初めに関西社会福祉学会理事である黒木保博先生の挨拶があり、「国際比較研究の枠組み構築—研究対象設定を中心に—」というテーマに基づいた 4 人の報告が行われた。まず、陸麗君氏（華東理工大学客員研究員）からの「比較研究の枠組み構築について」の基調講演から始まり、羅佳氏（四国学院大学社会福祉学部准教授）の「日本の理論枠組みを用いて母国の実態をどう分析するのか」に対するご自身の経験を中心とした報告が続いた。この二人の報告者は、日本と母国を比較するという観点から見ることで、様々な研究素材を発見することができるという研究対象設定の方向性について語られた。

一方、同志社大学の博士後期課程に在学している任貞美氏・姜民護氏は、現在までの研究成果とともに現役の留學生として感じてきた率直な悩みや考えを吐露され、その場に出席した留學生たちの共感を得た。二人の報告者も先の報告者と同じく、研究対象を設定する際には、何よりも自分の問題意識や観点が重要であり、日本と母国の比較ないし第 3 国との国際比較が必ずしも留學の目的や課題というわけではないことを強調しておられた。

このような共通した見解は、報告以降に行われた質疑応答や総括においても同じ線上で議論された。そこに集まった若手研究者や院生らの研究テーマはもちろん、研究対象に対する見方や観点は様々であろう。しかし、研究に慎重に取り組む姿勢、さらには多様な社会問題を解いていこうとする情熱は一つのように感じられた。改めて良い機会を企画してくださった日本社会福祉学会関西地域ブロックの関係者や報告者に共感と励ましの拍手を送りたい。これからも、このような機会の蓄積を介して多くの若手研究者同士が楽しく研究者への道に進んでいけるよう願っている。